

— 絆 — 夫 明美

12月10日、清水寺を舞台にして、2010年「今年の漢字」が発表されました。2010年は野菜を高騰させた記録的な猛暑の影響か、「暑」が選ばれました。全国学生グループアンケートで学生に選ばれた一字は「迷」、就職に迷う学生の姿が目に見えます。ちなみに菅総理が選んだ一字は「行」でした。

さて、国内・国外での大きな出来事を振り返ると、私には「絆」という一字に象徴されるものが強く印象に残ったように思います。初夏の日本をサムライブルーに染めた日本代表選手、チリの鉱山で2ヶ月あまりも地下に閉じ込められたあと無事生還された作業員の方々。いずれもチームの固い結束、それを取り囲む人々との間の強い結びつきを感じずにはおれませんでした。その反面、「無縁社会」や「すべり台社会」という言葉に象徴されるように、人と人の結びつきや人間と社会の結びつきが弱くて薄いものになりつつある厳しい社会状況も現代の日本を取り巻いている様子です。

「絆」を少し異なる観点から考えてみましょう。

少し前の話になりますが、夏休みの間に古い本棚を整理していた時、数年前に何度も読み返した一冊の本を再び手にすることがありました。気に入った箇所をメモ書きしていたものも残っていたので、再び読み返してみました。過去に心に響いた箇所は依然として強い感動をもたらすものでしたが、以前とは異なる解釈を持ったり、昔は気づかなかった箇所が心に響いてくるものがありました。「不思議だな」と思うと同時に、自分の中に「変わる部分と変わらない部分」があるのも面白いことだと思いました。

同じようなことが、10年ぶりに訪れた美術館で、以前興味をもって眺めた絵画を再び見たときにも起こりました。学生時代の私にはロマンチックな印象だけが鮮やかにうつつたので、今回も気分の高揚があるのではないかと胸を高ぶらせながら、展示室へと足を速めました。再びその絵を目の前にした時に、再会を喜ぶ気持ちもありましたが、以前は全く思いもしなかった一抹の寂しさや薄い倦怠のようなものが、絵の中に描かれているようにうつりました。その時にも、年齢や経験を経るにつれて変わる部分と変わらない部分があることが面白いものだと思いました。そこには時間を越えて過去の自分とコミュニケーションしているような興味深さがありました。次にその絵を目にするときはどのような印象を持つのかも興味深いところです。

絆というものは人と人之間だけに限られるものでも、時間軸上のある一点だけに限られるものではないのかもしれない、と書物や芸術作品に改めて教えられた2010年でした。